

日本の韓国語教育における品詞と活用

Part-of-speech and conjugation in Korean language education in Japan

五十嵐 孔一

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

IKARASHI Koichi

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. 日本の韓国語教材・辞書における記述
 - 1.1. 石原六三・青山秀夫(1963)『朝鮮語四週間』
 - 1.2. 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)『現代朝鮮語辞典』
 - 1.3. 梅田博之(1976)『韓国語 I』
 - 1.4. 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』
 - 1.5. 梅田博之(1985)『NHK ハングル入門』
 - 1.6. 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)『朝鮮語大辞典』
 - 1.7. 菅野裕臣他(共編)(1988/1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』
 - 1.8. 油谷幸利他(共編)(1993)『朝鮮語辞典』
 - 1.9. 語基について
 2. 韓国の学校文法
 3. 日本の韓国語教材・辞書と韓国の学校文法での文法用語
- おわりに

キーワード：韓国語教育, 品詞, 活用, 語基, 学校文法

Keywords: Korean language education, part of speech, conjugation, verbal base, school grammar



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

日本の韓国語教育に関する研究は、2000年以降、韓国語教育の現状や習得すべき文法項目について論じられる傾向がある。1960年代から1990年代の主要な教材と辞書を対象にして品詞や活用などの文法に関する記述をまとめたところ、次のような相違点が見られた。

- ①「이다」を「独立した品詞と見なす」/「語尾と見なす」。
- ②語幹末に「ㄷ」を持つ用言を「ㄷ変則」/「ㄷ語幹」と呼ぶ。
- ③「있다」と「없다」を「独立した品詞として認める」/「形容詞に含める」。
- ④「는, 가…」は「助詞である」/「語尾である」。
- ⑤用言は「語幹」/「語基」に語尾を付けて活用する。あるいは、「動詞節」/「述語」の構造は語幹に語幹形成接辞が付き、これに語尾が付いて構成される。

また、韓国においても語基と共通する捉え方が認められること、語幹と語基のいずれによっても実現する活用形は同一であることを述べた。最後に、韓国の学校文法についても触れ、日本の韓国語教育で用いる文法用語と対照した。

Abstract

Research on Korean language education in Japan since 2000 has tended to discuss the current state of Korean language education and the grammatical items that should be mastered. The following differences were found in the descriptions of parts of speech, conjugations, and other grammatical features in major teaching materials and dictionaries from the 1960s to the 1990s.

- (1) "i-da (이다)" is regarded as an independent part of speech/as an ending.
- (2) A declinable word with "l (ㄷ)" at the end of the stem is called "l (ㄷ) irregular"/"l (ㄷ) stem".
- (3) "iss-da (있다)" and "eobs-da (없다)" are "recognized as independent parts of speech" /"included in adjectives".
- (4) "neun (는), ka (가)..." are "particles"/"endings".
- (5) The lexeme is conjugated by adding an ending to the "stem"/"verbal base" of the word. Alternatively, the "verb clause"/"predicate" structure consists of a stem with a stem-forming affix followed by an ending.

In addition, it was pointed out that in Korea, a common viewpoint with the verbal base is also recognized, and that the conjugations realized by a stem or a base are the same.

Finally, Korean school grammar is discussed and contrasted with the grammatical terminology used in Korean language education in Japan.

はじめに

本稿は韓国語の品詞と活用が日本の韓国語教育においてどのように扱われてきたか、教材と辞書の記述をもとに論ずるものである。先行研究では主に韓国語教育の現状や問題点¹⁾、習得すべき文法項目²⁾について論じられている。その背景には韓国語を開講する大学数が増加したこと³⁾、またそれに伴い、韓国語教材が増えたこと⁴⁾があげられる。特に2000年以降その傾向が顕著である⁵⁾。ところが、品詞や活用などの文法に関する検討は、語基を除けば、韓国語教育でほとんど取り上げられない状況が続いている。そこで1960年代から1990年代の主要な教材と辞書を対象にしてそれらに対する記述をまとめ、現在の韓国語教育とのつながりをさぐることにする。活用では語基についても触れる。また、韓国の学校文法とのつながりも視野に入れ、その性格と歴史、そして文法的な特徴を見ていくことにする。

1. 日本の韓国語教材・辞書における記述

1.1. 石原六三・青山秀夫(1963)『朝鮮語四週間』

本書は大学書林の語学四週間双書の一つである。石原六三と青山秀夫の著述によるものであり、河野六郎が監修している。第一週と第二週に文法と発音を学び、第三週に短い文章の訳読を行いながら文法解説を加え、第四週に様々な文体の長い文章をあげている。附録には代名詞、数称⁶⁾、感歎詞のリストを付している。

品詞は体言・用言・助詞・感歎詞に分け、用言は動詞・形容詞・存在詞・指定詞に分類している。指定詞の導入が早く、最初の単元で既に現われ、「体言を肯定の説明文にする場合には、指定詞の語幹イと終止語尾オを付ける」と説明している⁷⁾。

助詞はまず、開音節語に付くもの、閉音節語に付くもの、さらに開音節語と閉音節語に共通し

1) 日本の高校と大学の現状について大規模な調査を実施した国際文化フォーラム(2005)、韓国語教育の現状と課題を論じた桂正淑(2005)、韓国語教育における四技能の育成の必要性を述べた中島仁(2021)など。

2) 初級・中級・上級のレベル別の教材における文法項目を検討した永原歩・尹亭仁(2012)、教材における文法説明について問題点を指摘した金蘭美(2013)など。

3) 国際文化フォーラム(2005:34)は日本の四年制大学において韓国語を開講している大学数の割合を以下のように報告している。調査期間の1995年度から2003年度に増加傾向が認められる。

1995年度 565校中 143校(25.3%)

2000年度 649校中 263校(40.5%)

2001年度 669校中 285校(42.6%)

2002年度 686校中 322校(46.9%)

2003年度 702校中 335校(47.7%)

中島仁(2021:230)はこの傾向について「この調査以降、大規模な調査が行われておらず2021年度現在はさらに拡大していることが予想される」と述べている。

4) 国際文化フォーラム(2005:59-61)によれば、2002年度から2003年度に限ってみても、四年制大学で使用された韓国語教材の数は、プリント教材や自主作成教材を除外しても100種類に及ぶ。

5) その契機として、2002年に大学入試センター試験に韓国語が外国語科目として正式に導入されたこと、同じく2002年にサッカーワールドカップが日韓で共同開催されたこと、また韓流のブームなどが考えられる。金賢信(2002:83)、永原歩・尹亭仁(2012:95)、金蘭美(2013:51)、中島仁(2021:230)参照。

6) 数詞、数量冠形詞、月称、日称、順序・回数を含む。

7) 石原六三・青山秀夫(1963:5)参照。

て用いられるものに分け、それぞれ一類助詞、二類助詞、三類助詞と呼んでいる。以下、助詞を格助詞・補助詞・接続助詞に分けて解説するなかで、一類～三類の別が併記されている。例えば、主格助詞は「가(一類)/이(二類)」, 属格助詞は「의(三類)」のように示している。格助詞は主格・目的格・属格・補格助詞⁸⁾・副詞格助詞に分け、補助詞は同一「도」, 単独「만」, 各自「마다」, 開始「부터」等をあげている。なお「는/은」は主格助詞として処理している⁹⁾。接続助詞は体言と体言を接続する「와/과/하고」, 主語と主語を接続する「고/이고/며/이며/하며/에」, 文と文を接続する「마는/시피」をあげている。語尾には終止語尾・接続語尾・連用形語尾があるほか、「지아니하오, 지마시오, 지답시다」を合成語尾と呼んでいる。

韓国語の助詞と語尾について、石原六三・青山秀夫(1963:3-4)はごく初めの段階で日本語と対照させながら次のように解説している。

- (1) 体言には助詞(テニヲハ)が付いて他の語との関係を示す。「体言+助詞」の例に「사람+이, 햇빛+을」等。
- (2) 用言語幹には語尾(日本語の助動詞)が付いて陳述語の役目を果たす。「지-고」(接続語尾), 「커다랗-ㄴ」(連体形), 「뛰-어」(連用形), 「오-ㄴ다」(終止語尾)等。

また石原六三・青山秀夫(1963:37)によれば、接辞とは語幹と語尾の間に付けるもので補助語幹のことである。時制の現在・過去「았/였/있」・未来「겠」, 被動詞「히/이/리/기」・使動詞「히/이/리/기/우/구/추」, そして謙讓「오(읍)」がある。なお「시」は敬語接尾辞である。

以上の他に品詞には感歎詞があり、附録に意味別に細分化されている。副詞についてはとりたてて解説していないが、各単元の単語リストに副詞の語彙が載せられている。

次に活用について見てみる。石原六三・青山秀夫(1963:70)は規則的に活用する例として「잡다, 보다, 적다」をあげている。これらは原形であり、終止形は「잡소, 보오, 적으오」と表わされる。この活用が初めに言及されるのは、石原六三・青山秀夫(1963:6)の「～ます」にあたる「(으)오/소」の導入においてである。その解説は次の通りである。

用言を肯定の陳述文にする場合は、用言の語幹に終止語尾오又は소を付ける。但し、오を用いる場合に語幹が閉音節であればつなぎ母音(으)を挿入して으오とする。소は閉音節語幹にのみ付き、開音節語幹には用いない。

つまり石原六三・青山秀夫(1963)は、活用とは語幹に語尾が付くことでなされることを述べているわけである。「(으)」については「つなぎ母音」と明記している点が注目される。なお「잡아, 보아(봐), 적어, 하여(해)」といった連用形は連用形語尾「아, 어, 여」が語幹に付いたものと解説している。

以上のような規則的に活用するものに対して、変則的に活用するものを「変則活用」と呼び、「語

8) 補格助詞は「体言を否定の説明文にするとき」に用いる「가/이」をいう。石原六三・青山秀夫(1963:21)参照。

9) 「～は」は主格ではないが「～が」と区別するのが困難であるし、朝鮮語もこれにやゝ似ている」ということから「는/은」を「가/이」とともに主格にあげている。石原六三・青山秀夫(1963:15)参照。

幹末音が脱落する」ものを「ㄷ変, ㄴ変, ㄹ変, ㅇ変」, 「語幹末音が変化する」ものを「ㄷ変, ㄴ変」, 「語尾が変化する」ものを「여変, 리變」, 「語幹と語尾が共に変化する」ものを「ㄷ變」というように、9種類に分類している。

1. 2. 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)『現代朝鮮語辞典』

河野六郎が序文に記したところによると、この辞書の骨格は天理大学朝鮮学科研究室の安吉保と孫洛範によって築き上げられたもので、仕上げには石原六三、青山秀夫の名もあげられている。本稿ではこの辞書の末尾に付された「文法概説」を見ていく¹⁰⁾。

まず品詞は名詞・代名詞・動詞・形容詞・存在詞・冠形詞・副詞・感歎詞・接続詞・助詞の10品詞に分けられている。数詞は数代名詞として代名詞に含まれている。用言には動詞・形容詞・存在詞を含めるが、指定詞は認めていない。天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:798)は「体言を叙述語として用いる場合は、動詞や形容詞と同じく、体言に各種の語尾をつける」と述べ、「(이)다」を、肯定を表わす「終止語尾」としている。これは指定詞を認めた石原六三・青山秀夫(1963:5)とも、叙述格助詞とした安田吉実・孫洛範(共編)(1983:1489, 2111-2112)とも異なる。

助詞を「母音で終わる語につく助詞」(一類), 「子音で終わる語につく助詞」(二類), 「上記の両者に共通してつく助詞」(三類)と分類するのは、石原六三・青山秀夫(1963:15)で見た分類法と同じである。助詞はその機能によって格助詞・補助詞・接続助詞・感歎助詞に分類している。格助詞には主格・属格・目的格のほか、場所格・方法格等、計9つの格助詞をあげている。石原六三・青山秀夫(1963:21)にあった「補格助詞」はなく、石原六三・青山秀夫(1963:24-26, 30-32)の「副詞格助詞」は「場所格」「方法格」等と細分類されている。補助詞には同一「도」, 単一「만」, 開始「부터」等があるほか、「는/은」も補助詞に含まれている。接続助詞には体言接続の「와/과/고/이고」等や文接続の「마는/시피」がある。感歎助詞には体言の後に付く「나/이 나/도¹¹⁾」と、文の後に付く「그러」を認めている。

天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)によれば、体言の後に付き得るものには上に見た助詞と「(이)다」のような語尾がある。助詞は「文中において各種の関係を示し」¹²⁾、語尾は「体言を叙述語として用いる場合に「体言に各種の語尾をつける」と説明しているが¹³⁾、これはつまり助詞は文を構成する上で必要な単語間の関係を示し、語尾は叙述語の位置にあって統辞論的に文をまとめる働きをするということである¹⁴⁾。こうした助詞と語尾に関する見解は石原六三・青山秀夫

10) 同じく末尾には「発音法」「助詞一覧表」「用言活用一覧表」「語尾一覧表」があるが、これらは後の『民衆어센스韓日辞典』(安田吉実・孫洛範(共編), 1983, 民衆書林)の付録にある「한국어 발음법」(韓国語発音法), 「조사일람표」(助詞一覧表), 「용언 활용 일람표」(用言活用一覧表), 「어미 일람표」(語尾一覧表)の基盤となった。ただし『民衆어센스韓日辞典』(1983:2111-2112)では「이다」を「叙述格助詞」としてその一覧表を載せているが、天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)には無い。

11) 例として「사람도 많다! (なんと人が多い!)」「벌써 열두시가 되었네. (もう十二時になったよ!)」をあげている。天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:797)参照。

12) 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:795)参照。

13) 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:798)参照。

14) 高永根(1993:24)は助詞が「文の形成に積極的に参与する機能」を持つ「文形成素」(原文では「문장형성소」(文章形成素))の資格を持ち、語尾は「依存形式」であるが「統辞論的には文全体を締めくくる機能を帯びている」と説明している。

(1963:3-4) と基本的には同じであるが¹⁵⁾、体言が叙述語として用いられることから体言にも語尾が付き得ると見なした点が天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)の特徴である。天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:798)は「(이) 다」の「이」に対する「品詞設定については種々の説がある」としながらも「説の如何に拘らず、子音で終わる体言の下には“이”をつけて用いる」と述べ、「이」に単語の資格を認めない立場を取ったのである。

次に活用については、「動詞はその語幹に次のような語尾をつけて活用する」と述べ、「먹+는다」(終止語尾)、「먹+고」(接続語尾)、「먹+기」(転成語尾)の例をあげている。語幹に語尾を付けて活用する、といった見解は石原六三・青山秀夫(1963:6)と同じである。「(으) 먼」のような「(으)」については「終声がある用言語幹に語尾が接続する場合に発音を調整するための介入母音」であると説明している¹⁶⁾。なお天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)であげられた変則動詞と変則形容詞を整理すると次の通りである。変則的に活用する種類は計9つで、変則動詞と変則形容詞にそれぞれ8つの変則活用が含まれる。

[表 1] 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)における変則動詞と変則形容詞の例

特徴	変則動詞	変則形容詞
終声が脱落する	ㄷ変則動詞	ㄷ変則形容詞
	ㄴ変則動詞	ㄴ変則形容詞
	-	ㅎ変則形容詞
終声が変化する	ㄱ変則動詞	ㄱ変則形容詞
	ㄷ変則動詞	-
中声が変化する	ㅏ変則動詞	ㅏ変則形容詞
	ㅜ変則動詞	ㅜ変則形容詞
語尾が変化する	ㄹ変則動詞	ㄹ変則形容詞
語幹と語尾が変化する	ㄹ変則動詞	ㄹ変則形容詞

1.3. 梅田博之(1976)『韓国語Ⅰ』

本書は『韓国語Ⅱ』とからなる二巻本の上巻である。梅田博之(1976)は韓国語の基礎的な語彙を「あいさつ・重要語」に始まり、「代名詞など」「助詞など」「人体」「衣服」「食物」等の計28のカテゴリーに分類し、それぞれの単語を韓国語の単文とともに示している。また韓国語の単語に関して日本語で解説を加えている。

梅田博之(1976)の「文法概説」の特徴は、初めに文の種類を説明してから、次に個々の文の構成要素に説明が及んで行くところにある。文は独立文・単文・複文に分類されるが、単文はさらに名詞節文・自動詞節文・一他動詞節文・二他動詞節文に分かれ、名詞節文は名詞節と指定詞からなり、名詞節は名詞を核としてできている、という具合である。自動詞節文には目的語をとらない動詞を格とする動詞節が含まれるが、その動詞には自動詞のほか、形容詞と存在詞も含まれる。

ところで「나는 학생이다.」(私は学生だ。)という単文は「나는」(私は)と「학생」(学生)の2

15) 助詞は他の語との関係を示し、語尾は陳述語の役目を果たすという点。本稿 1.1. の(1)(2)参照。

16) 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967:799)参照。

つの名詞節と指定詞「이다」(だ)からなり、指定詞の前には名詞だけの名詞節「학생」が来ることができる。このようにして梅田博之(1976:23)は「학생이다」(学生だ。)の「학생」を「指定詞の補語となる名詞節」と呼び、主語の現れない文を説明している。

助詞は節形成助詞・強めの助詞・連結助詞がある。節形成助詞には名詞節形成助詞と副詞節形成助詞があり、前者には主節を作る「이~가」,目的節を作る「을~를」,間接目的節を作る「한테, 께, 에게, 한테서, 에게서」があり、後者には副詞節を作る副助詞として「에, 로~으로, 에서」等がある。目的節は一他動詞節文と二他動詞節文に含まれ、間接目的節は二他動詞節文に含まれる。強めの助詞には「은~는, 도, 만, 조차」等、連結助詞には「과~와, 하고」がある。

ところで梅田博之(1976)は「活用」という用語を用いていない。これも梅田博之(1976)の特徴の一つである。梅田博之(1976:25)によれば「動詞節の構造は、語幹にいろいろな語幹形成接辞が付き、これに更にさまざまな語尾が付いてできている」のである。語幹は「母音語幹・子音語幹・ㄷ語幹」を認め、語尾と接辞は「子音語尾・어語尾・으語尾」に分けている。例えば、子音語尾として基本形語尾「+다」,어語尾として完了連用形語尾「+어」,으語尾として条件連用形語尾「+으면」をあげている。梅田博之(1976:26)は変則用言に「ㄱ変則, ㅋ変則, ㆁ変則, ㆏変則, ㄹ変則, ㄴ変則」の6つを認めている。従来の「ㄷ変則」は「ㄷ語幹」の特徴として、また「으変則・하變則」は「어語尾」が付くときに注意すべきものとして説明している。なお接辞とは「語幹に付いて更に延長語幹を形成する」ものであり¹⁷⁾、語幹形成接辞と他動詞語幹形成接辞がある。前者には敬語接辞「+으시+」,過去語幹接辞「+았+」,未来語幹接辞「+겠+」があり、後者には「+이+, +히+, +기+, +리+」等がある。

1. 4. 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』

月脚達彦・伊藤英人(1999:990-992)によれば、「一九七七年四月一日(朝鮮語)学科の開始とともに九州大学文学部から、東京外国語大学朝鮮語学科の初代教官として着任した」のが著者の菅野裕臣である。その当時、「言語学的な正確さをもつ朝鮮語諸教材の作成が急先務」であった。「朝鮮語学科が七九年に行った市民のための朝鮮語公開講座用テキスト」が菅野裕臣によって作成され、「このテキストが母胎となり、大幅な増補が加えられて」出版されたのが『朝鮮語の入門』である。菅野裕臣(1981)には文字と発音が50ページ余りにわたって詳述され、全35課の単元と、金東仁の小説『붉은 산』や1896年の『獨立新聞』の論説等、計8編のよみものが含まれている。

体言には名詞¹⁸⁾・代名詞・数詞、用言には動詞・形容詞・存在詞・指定詞をあげている。また体言は母音語幹・子音語幹、用言は母音語幹・ㄷ語幹・子音語幹に分け、これらの語幹に語尾が付くことを述べている。助詞は認めず、「-가/-이, -와/-과, -만」等を体言語尾としている¹⁹⁾。なおこれらの体言語尾は格語尾・並立語尾・副語尾に分類される。用言語尾には終止形語尾・中

17) 梅田博之(1976:27)参照。

18) 名詞は完全名詞と不完全名詞に分ける。また「평화적, 자주적」のような「…적<的>」という単語を「形容名詞」と呼んでいる。菅野裕臣(1981:146)参照。

19) 2007年に刊行された改訂版では助詞を認める立場をとっている。ただし、ハイフン(-)を付けて示すところは従来通りである。これに先立つ菅野裕臣(1995:3)で「책이, 책을, 책에, 책과; 책은, 책도, 책만…」は「体言の格語尾による語形変化というものではなく、体言に格助詞の結合したもの」だと述べている。

止形語尾²⁰⁾・接続形語尾・連体形語尾・副詞形語尾・体言形語尾がある。また「아이들, 문제들」のような「-들」を複数語尾としている。なお菅野裕臣(1981:82, 101)は接尾辞「-겠-」を持つ形を「意思=推量形」と呼び、従来の「未来」とする見解をとらなかった。

活用において菅野裕臣(1981)を特徴づける点は「語基」の導入である。「用言の語幹は具体的には語基という形で」現れると述べ、次のように日本語と対照させながら説明している²¹⁾。

例えば日本語で「書かない」は「書く」という動詞のいわゆる未然形「書か」にいわば語尾「ない」がついてきたものですが、この未然形、その他の活用形が語基にあたるものです。

例えば「잡다」の語幹「잡」は「잡-, 잡으-, 잡아-」と活用するが、このように用言語幹が活用する形が語基であり、それぞれ順に第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基と呼んでいる。語尾はどの語基に付くか決まっている。語基については1.9.で再び触れることにする。菅野裕臣(1981:92)に従って正格用言「가다, 팔다, 잡다」の語基を示すと[表2]のようになる。

[表2] 菅野裕臣(1981)における正格用言の語基

語幹	基本形	第Ⅰ語基	第Ⅱ語基	第Ⅲ語基
母音語幹	가다	가-		
ㄷ語幹	팔다	팔-/ 파-		팔아-
子音語幹	잡다	잡-	잡으-	잡아-

菅野裕臣(1981)であげられた変格用言には「ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, 하다変格用言」の7種類がある。

1.5. 梅田博之(1985)『NHKハンゲル入門』

著者の梅田博之は当時、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長であった。1984年4月からNHKテレビで始まった「アンニョンハシムニカ〜ハンゲル講座〜」の講師を担当しており、本書は単行本として出版されたものである。

梅田博之(1985:264-280)の「基本文法概説」で文の種類から始まり、その内部構造を分析しながら文法を解き進める方法は梅田博之(1976)を踏襲しているが、細部の解説には若干の変更・追加が見られる。まず梅田博之(1976:19)では文の内部構造を名詞節・動詞節・副詞節と分析していたところを、梅田博之(1985:264)では「動詞節」を「述語」に変更している。また単文の文型を「(品詞)節文」という名称から「(品詞)文」に変えたほか、「自動詞節文」を自動詞文・存在詞文・形容詞文に細分類している。さらに助詞について、主節・目的節・間接目的節を作る名詞節形成助詞として導入していたところを、梅田博之(1985:276-268)では格助詞と表記して、主格助詞・対格助詞・与格助詞・奪格助詞に分類している。

ところで「動詞節の構造」として説明していたところを、「動詞節」を「述語」に変更したことで、梅田博之(1985:270)では「文の中で用いられる述語の構造は、語幹にいろいろな語幹形成接辞が

20) 中止形語尾には「-고, -지, -더니지만/-습니다만」がある。菅野裕臣(1981:79)参照。

21) 菅野裕臣(1981:82)参照。

付き、これにさらにさまざまな語尾が付いて構成されると説くことになった。これにより、述語となり得る指定詞・存在詞・形容詞・自動詞・他動詞がこの説明に該当することが理解しやすくなった。なお語幹を「母音語幹・子音語幹・ㄷ語幹」、語尾と接辞を「子音語尾・어語尾・으語尾」、変則活用を「ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則, ㅎ変則, ㄹ変則, ㄹ變則」の6種類とするのは梅田博之(1976)と同じである。

1. 6. 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)『朝鮮語大辞典』

この辞書は塚本勲・北嶋静江が主幹となり、大阪外国語大学朝鮮語研究室が編纂したもので、上下二巻と補巻からなる「朝-日辞典」である。辞書完成までの22年に及ぶ経緯については巻頭の「編者のことば」に詳しい。巻頭論文及びエッセイには泉井久之助、服部四郎、村山七郎、河野六郎、青山秀夫、梅田博之、菅野裕臣ら14名が名を連ねている。本稿では上巻の「凡例」と下巻の付録の「用言の活用」を参照することにする。

品詞は名詞・代名詞・数詞・動詞・形容詞・副詞・感嘆詞・冠形詞・助詞の9品詞を認めている。大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986:2677)は用言を「動詞・形容詞・있다・없다・이다」と分けているが、辞書の本編で「있다」と「없다」を形容詞、「-이다」を語尾に分類している。ただし「-이다」については「이다の品詞に関しては、語尾とするほかに、指定詞、助動詞、助詞などとする見解がある」と注を付している²²⁾。

活用は語幹と接辞・語尾との接続関係でとらえた活用表をあげている。活用表では縦に接辞・語尾を示し、横に「双対式」「単一式」を示している²³⁾。大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986:2677)によれば、「双対式は接続の形がふたつ対になっていて、選択を要するものをいい、単一式は選択を要せずただひとつの接続の形をもつもの」である。つまり双対式には「으」で始まる語尾に「母音接続形(ㄴ다, ㄷ, 시等)」と「子音接続形(는다, 을, 으시等)」の選択があり、「어」で始まる語尾に「陽母音形(았, 아라等)」と「陰母音形(있, 어라等)」の選択があることをいう。「으」で始まる語尾を「連音系(クッション)²⁴⁾」といい、「어」で始まる語尾は「母音調和系」と呼んでいる。単一式には子音で始まる「겠다, 는, 던」がある。

活用には規則活用と不規則活用があり、後者は単純脱落型「ㄷ変則活用・으変則活用・우変則活用」、脱落移行型「ㅎ変則活用・ㄷ変則活用」、現出型「ㄹ変則活用」、単純交替型「ㄷ変則活用・ㄹ変則活用」、交替移行型「ㄷ変則活用」、その他「여変則活用・거라変則活用・니라変則活用」の12種類に分かれる。

1. 7. 菅野裕臣他(共編)(1988/1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』

この辞書は1988年に初版が出版された後、韓国の1989年改訂正書法で認められた標準語形を収録した第2版が1991年に出版された。

22) 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986:1889)参照。

23) 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986:2677)によれば、この活用表は『朝鮮語入門』(塚本勲 1983, 岩波書店)に基づくものである。

24) 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986:2677)は、「連音系(クッション)」という命名は接続の際の音的現象に基づくものだと説明している。

菅野裕臣他(共編)(1988/1991:1008)は単語が「文法的には語幹と語尾からなる」と定義し、「語尾が付かないもの(不変化詞)」と「語尾が付き得るもの(変化詞)」に分けた。前者には副詞・冠形詞・後置詞・接続詞・間投詞があり、後者には体言(名詞・代名詞・数詞)と用言(動詞・形容詞・存在詞・指定詞)がある。語尾は体言語尾・とりたて語尾・用言語尾に分類した。体言語尾には格語尾と並立語尾があり、前者は主格・対格・属格等のほか、語幹格として「-ゼロ」を認めている。とりたて語尾は菅野裕臣(1981)の副語尾にあたる。なお菅野裕臣(1981)の中止形語尾「-고, -지」は接続形語尾に含められた。

活用において用言の母音語幹・ㄷ語幹・子音語幹が語基の形で現れるところは菅野裕臣(1981)と同じである。語基については1.4.と後述の1.9.を参照されたい。なお「-하다」については1989年改訂正書法以後も第Ⅱ語基に付くことを認めている。変格用言には「ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言, ㄷ変格用言」の6種類をあげ、菅野裕臣(1981)であげた「하다変格用言」は「不規則用言」としている。

1. 8. 油谷幸利他(共編)(1993)『朝鮮語辞典』²⁵⁾

まえがきに「学習上役に立つ辞典となることを目指した」とあるように、全ての用言に活用番号が付いており、巻末の用言活用表を参照すれば、変則活用についての知識が無い学習者でも自力で活用形が作れる配慮がなされている。

品詞には名詞・代名詞・数詞・動詞・形容詞・存在詞・指定詞・冠形詞・副詞・感嘆詞・助詞を認め、語尾には接続語尾・終結語尾・連体形語尾・引用形語尾・名詞形語尾をあげている。補助語幹には時制補助語幹「-았-(過去), -ㄹ-(未来・推量)」, 尊敬補助語幹「-시-」, 美化補助語幹「-읍-」がある。体言は母音体言・子音体言・(ㄷ体言)に分け²⁶⁾, 用言語幹は母音語幹・ㄷ語幹・子音語幹に分けている。また「語幹の最後の音節に陽母音を含むもの」と「語幹の最後の音節に陰母音を含むもの」をそれぞれ陽語幹・陰語幹と呼んでいる。

変則用言には「ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則」²⁷⁾, ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則, ㄷ変則」の10種類をあげている。

油谷幸利他(1993:1986)では活用を「用言の語幹に語尾が接続して命令・疑問・逆接・仮定など様々な文法的意味を表わすことを言う」と定義し、用言を活用のタイプに従って4つの群、用言に付く語尾を5つの類に分類した。用言に付けられた活用番号は補助語幹も含め、67までである。つまり全ての用言が群と類の組み合わせで67のパターンにまとめ上げられたわけである。

1. 9. 語基について

1.4. では語基について概略を述べた。ところで、語基の概念は『韓語通』(前間恭作 1909)が初出であり、前間恭作(1909:144)に既に「語基」という語が用いられている。つまり「我國の動詞には活用と稱へ來れる語基ともいふべき形」があり、「「あ」、「い」、「う」、「え」などの母音を一

25) 2018年に改訂し、書名を『小学館 韓日辞典』と変更している。

26) ㄷ体言については、子音体言のうち「語末がㄷで終わる体言を特にㄷ体言と呼んで区別することがある」と述べるにとどめている。油谷幸利他(共編)(1993:XI)参照。

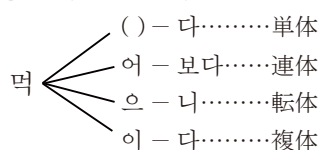
27) 그러다, 어쩌다等。

且語根に加へ之を言ひ据へたる上にて語尾を附するを常とす」と述べているのである。ただし韓国語の「잡」のような「語根子音で終わるもの」に対しては「어」「으」の母音で始まる「助動詞は直に語根に付け加」えられるため、「朝鮮語には語基の形」が無いことを述べている。前間恭作(1909:149)が示した活用は「子音に始まる助動詞を受くる形」が「잡」, 「어」の助動詞を受けたる形」が「잡아」, 「으」の助動詞を受けたる形」が「잡으」であった。ところが『龍歌故語箋』(前間恭作 1924)で中期朝鮮語の活用を示すにあたり、「I. いひすゑた形」に「잡」, 「II. 連用につかふ어」に「자마」, 「III. 不定法語基の오」に「자보」, 「IV. 調聲のための으」に「자ㅅ」を示し得ることから²⁸⁾, 韓国語の活用の図が「國語の活用の圖に似たものとなる」と言うに至ったわけである²⁹⁾。

ところで、語基と共通する捉え方が韓国においても認められる。『修正 朝鮮文法』(安廓 1917/1923)と『신편 고등국어문법』(新編高等國語文法)(鄭烈模 1946)がそれである。これについて論じた이카라시 고이치(2002:101, 104-109)の要点を引用、また補足して示すことにする。

まず、安廓(1917/1923:45)の「動詞の変化³⁰⁾」によれば、動詞は次のような規則によって変化する³¹⁾。

【図1】安廓(1917/1923:45)の「動詞の変化」



語幹³²⁾の먹(食べる)に「(), 어, 으, 이」³³⁾が付いた形、つまり「먹, 먹어, 먹으, 먹이」が「単体、連体、転体、複体」である。これらがまさに語基に相当する。上の図はこの形に他の語が付いて「먹다, 먹어 보다, 먹으니, 먹이다」となることを示している³⁴⁾。

次に、鄭烈模(1946:38)の活用分類を見てみると以下の通りである。この表の「第一形、第二形、第三形」の「먹어, 먹으, 먹」が語基にあたるわけである。

28) 前間恭作(1924:23) 参照。

29) 前間恭作(1924:22) 参照。

30) 原文は韓国語。引用にあたっては日本語に訳して示す。

31) 原文では縦書き。

32) 安廓(1917/1923:52)は語幹のことを「語本」と呼んでいる。

33) 「()」は何の音も無いことを示す。また、図の後で「어, 으, 이」について「各種の間音を入れる」と説明している。ただ、図の前では「動詞はその用法上の異同によってその語尾が諸種の支体を生む方法がある」と説明しており、「間音」と「語尾」が区別しにくい。「形容詞の変化」においても安廓(1917/1923:75)で「動詞と同じようにその語尾が変化する」「その活用する語尾の変化はまさに動詞と同じで三種がある」と述べている。この区別に関連して、後に鄭烈模と論争が起きている。本稿の脚注38) 参照。

34) 1917年の初版本は『自山安廓國學論著集 一 第一部 著書類』(1994)の刊行当時、存在は知られていたが所在は不明であった。정승철・최형용(2015:4)によると、梨花女子大学に所蔵されていた初版本が世に知られるようになったのは2012年に至ってである。初版本42ページの「動詞の接成変化」に「먹어-라」「먹으-니」があげられており、「어 間音」または「으 間音」を入れた後に「助動詞を合わせるもの」と説明している。정승철・최형용(2015:60) 参照。

[表 3] 鄭烈模 (1946:38) の活用分類³⁵⁾

第一形	먹어 + 보시오, 가나다, 지나다, 버리나다, 대나다, 없세나다
第二形	먹으 + 니, 면, 매, 므로, 나, 되, 라, 러, 락, 락, 오 (子音語幹には소)
第三形	먹 + 다, 는다, 자, 더라, 네, 게, 지, 고, 기, 더니, 소 (母音語幹には오)

ところで、鄭烈模 (1946) も「먹」を「말몸 (語幹)」として扱ってはいるが、「어, 으」を「말꼬리 (語尾)」とし³⁶⁾、「고, 면, 서」等については「도움낱뜻 (助辞)」の「빛 (格)」としている³⁷⁾。これは安廓 (1917/1923) とは異なる見解である³⁸⁾。

ここで語幹と語基の定義をまとめておくことにする。

- (1) 活用とは語幹に語尾が付くことである。語幹は変化しない部分、語尾は変化する部分である。
- (2) 語基は語幹が変化して現れる具体的な形である。3つあり、第Ⅰ語基、第Ⅱ語基、第Ⅲ語基と呼ぶ。語尾はどの語基に付くか決まっている。

このように、(1) は「語幹は変化しない」、(2) は「語幹が変化する」という対立が認められる。ところが、対立しながらも双方は成立しているのである。その事実を上での定義に従った活用表で示してみる。

[表 4] は語幹の定義 (1) に従い、語幹は変化せず、語尾が変化することを示している。また、[表 5] は語基の定義 (2) に従い、語幹が変化して3つの語基となり、語尾は決まった語基に付くことを示している。

ところで、灰色で塗りつぶした部分を見ると、どちらも同一であることが分かる。つまり、両者の立場は異なるものの、実現する活用形はどちらの説明方法でも同一なのである。

35) 鄭烈模 (1946) の用語では「첫가래 (第一形), 담가래 (第二形), 끝가래 (第三形)」「뭉침 (子音語幹), 단김 (母音語幹)」である。

36) 鄭烈模 (1946:37) 参照。

37) 鄭烈模 (1946:35, 143) 参照。

38) この「어」に対する見解の違いをめぐって安廓と鄭烈模は雑誌で論争している。河東鎬(編)(1986), 権五聖他(編)(1994) 参照。

安廓: 「朝鮮語研究의 実題」(1926.12, 東光 8)

「根母音变化의 組織」(1927.2, 東光 10)

「并書不可論」(1927.3, 東光 11)

鄭烈模: 「安廓君에게 与함」(1927.5, 東光 13)

安廓: 「吞棗나 構說이나」(1927.6, 東光 14)

この論争は安廓の3つの論著に対して鄭烈模が批判し、その批判に対して安廓が反論を行ったものである。論点をまとめると次のようになる。

安廓は「어」が無意味な音として動詞、形容詞等の語尾変化に属し、サンスクリット語の動詞が特殊な接辞を付けて変化する例と似ていると主張した。これに対して鄭烈模は安廓が「語尾変化」と「接辞添加」を混同していると批判した。「語尾変化」は単語自体の音韻変化であるのに対し、「接辞添加」は「어」に助詞の資格を与えるものだという点はその主旨である。そして膠着語である韓国語では単語自体の音韻屈折によってその意義が変化することがないので、「먹어」は助辞の力を借りて文法的機能を表すことになる主張したのである。

[表 4] 語幹の定義に従った活用表

		語幹	語尾		
			-지만 -는데	-(으)면 -(으)니까	-어서
母音語幹	가다	가-	가지만 가는데	가면 가니까	가서
	하다	하-	하지만 하는데	하면 하니까	해서 (하여서)
ㄹ語幹	놀다	놀- 놀- →노-	놀지만 놀는데	놀면 놀니까	놀아서
子音語幹	잡다	잡-	잡지만 잡는데	잡으면 잡으니까	잡아서
	먹다	먹-	먹지만 먹는데	먹으면 먹으니까	먹어서
	듣다	듣-	듣지만 듣는데	들으면 들으니까 (ㄷ-으→ㄹ-으)	들어서 (ㄷ-어→ㄹ-어)

[表 5] 語基の定義に従った活用表

		語幹			語尾		
		第Ⅰ語基	第Ⅱ語基	第Ⅲ語基	I-지만 I-는데	II-면 II-니까	III-서
母音語幹	가다	가-	가-	가-	가지만 가는데	가면 가니까	가서
	하다	하-	하-	해 (하여)-	하지만 하는데	하면 하니까	해서 (하여서)
ㄹ語幹	놀다	놀-/노-	놀-/노-	놀아-	놀지만 놀는데	놀면 놀니까	놀아서
子音語幹	잡다	잡-	잡으-	잡아-	잡지만 잡는데	잡으면 잡으니까	잡아서
	먹다	먹-	먹으-	먹어-	먹지만 먹는데	먹으면 먹으니까	먹어서
	듣다	듣-	들으-	들어-	듣지만 듣는데	들으면 들으니까	들어서

このように、語幹であれ語基であれ、いずれの定義に従っても同一の活用形を求めることが可能である。韓国語教育の観点から言えば、授業で使用する教科書などの教材、辞書、ひいては授業自体どちらかの定義に従っているのであるから、語幹と語基の両方とも理解しておくのが望ましいということになる。

2. 韓国の学校文法

次に韓国の学校文法について述べることにする。まず学校文法の性格について이관규 (1999:13) は「学校文法は学校で教授・学習される文法」であり、「規範的な性格」を帯びるとともに、「生活の中で実際的に有用でなければならない」ものであると説明している。

また이관규 (1999:28) は韓国の学校文法の歴史を、第1段階 (1895年～1949年)、第2段階 (1949年～1985年)、第3段階 (1985年以降) と分類している。

第1段階の状況については、1895年には漢城師範学校が設立され、同年8月公布の『小学校校則大綱』「読書科目第3条」からは「学校文法が教育課程の中に登場していることが分かる」と指摘している³⁹⁾。

第2段階は「初めて教科書検認定制が実施された」年である1949年を基準としている⁴⁰⁾。その後、1963年7月25日に「学校文法統一案」が公布され、1966年にこの統一案に従った中学校用文法教科書が検認定された⁴¹⁾。

1964年に文教部から出された『편수 자료 (제5집)』の「중고·등학교 학교 문법의 통일」に学校文法統一の経緯について触れた箇所があり、その統一案が「文法体系の統一案として品詞分類を9つとすべきことと、文法用語統一案として純国語からなるものと漢字音からなる語を折衷する」ものであることが記されている⁴²⁾。品詞は名詞・代名詞・数詞・動詞・形容詞・冠形詞・副詞・感嘆詞・助詞の9品詞である。「있다·없다」と「이다·아니다」については独立した品詞 (存在詞・指定詞) として認めなかったため、他の品詞に所属すべきだとして、議論が続いていたようである。「있다·없다」についてはこれらを全て形容詞に入れる案と、「없다」は形容詞に、「있다」は動詞に入れる案とが考えられ、「이다·아니다」については「아니다」は形容詞に所属するとしても、「이다」は品詞の資格が無いものと定めたため⁴³⁾、結局、「이다」を語尾と見なすという主張になるだろうと述べている⁴⁴⁾。

ところで『고등 국문법』 (한국 국어교육 연구회 1964) は統一案に従った教科書が現れる1966年までの空白期間を埋めることを目的とした教科書であるが⁴⁵⁾、そこでは「있다·없다」と「아니다」を形容詞、「이다」を接尾辞として扱っている⁴⁶⁾。翌年の『학교 문법 해설서』 (고창식他 1965:76, 80) では「있다·없다」を形容詞、「이다」を叙述格助詞ととらえているが、「아니다」の品詞は明らかにされていない。ただ、고창식他 (1965:77) で用言の解説に「그가 우등생 아닙니다

39) 이관규 (1999:28) 参照。

40) 이관규 (1999:30) 参照。

41) 이관규 (1999:31-32) 参照。

42) 문교부 (1964:2) の「학교 문법 통일에 대하여」参照。

43) 문교부 (1964:4) 参照。

44) 문교부 (1964:5) 参照。

45) 한국 국어교육 연구회 (1964) の「머리말」参照。

46) 한국 국어교육 연구회 (1964:36) 参照。

아니다⁴⁷⁾」(彼が優等生でないというわけではない)の例があることから「아니다」が用言に所属していることは知ることができる。なお「學校文法統一案에 따른 細部體系에 對하여」(學校文法細部體系統一協議會 1967:3-4)では助詞の中に叙述格助詞を含むことを明確に示し、「叙述格は語尾変化によって格の轉換をもたらす」と説明している。

이관규(1999)による第3段階は1985年に文教部から文法教科書として単一国定教科書が配布されたことに基づいて分類されたものである。以後、国定の学校文法の時期を이관규(1999/2002:32)は国定1期(1985年～1995年), 国定2期(1996年～2001年), 国定3期(2002年～現在)と分けている。

『표준 국어문법론』(남기심・고영근 1985)はこの国定1期の「高等学校単一文法の体系と用語に従って」構成された文法書である⁴⁸⁾。なお著者の남기심(南基心)と고영근(高永根)は単一国定教科書の開発に当たった研究委員であった⁴⁹⁾。남기심・고영근(1985:60)によれば単語は不変詞と可変詞に分かれ、前者には体言(名詞・代名詞・数詞), 修飾言(冠形詞・副詞), 独立言(感嘆詞), 関係言(助詞), 後者には用言(動詞・形容詞)があり, 合計で9つの品詞に分類されている。叙述格助詞は助詞に含まれながらも可変語に属している。「아니다」については、活用の仕方は「이다」と同じだが、「自立性を帯びているので形容詞に入れる」と述べている⁵⁰⁾。また「있다・없다」も形容詞として扱っている⁵¹⁾。不規則活用には「ㄸ不規則活用, ㅈ不規則活用, ㅊ不規則活用, ㅋ不規則活用, ㆁ不規則活用, ㄹ不規則活用, ㄴ不規則活用, ㄷ不規則活用, ㄹ不規則活用, ㄴ不規則活用, ㄷ不規則活用」の11種類を認めている。なお国定2期の文法体系に従った文法書に同じ著者による『최신판 고교문법자습서』(고영근・남기심 1999)がある。また国定3期の学校文法解説書である교육인적자원부(2002)では従来の「거라不規則活用」が規則活用として処理されている⁵²⁾。

3. 日本の韓国語教材・辞書と韓国の学校文法での文法用語

最後に、今回取り上げた日本の韓国語教材と辞書, そして韓国の学校文法で用いられる文法用語の一部を対照して示しておく。[表6]は「학교가(学校が), 학생도(学生も), 하겠다(するだろう), 하면(すれば), 한다(する)」に現われる「가, 도, -겠-, -면, -다」に対する文法用語を整理したものである。

47) 下線も原文通り。

48) 남기심・고영근(1985:ii)の「머리말」参照。なお남기심・고영근(1985)は改訂版(1993), 第3版(2011), 第4版(2014)と版を重ね, さらに共著者に유현경と최형용を加え, 全面改訂版(2019)が刊行されている。この全面改訂版には日本語訳版の五十嵐孔一(監訳)(2021)がある。

49) 이관규(1999:33)参照。

50) 남기심・고영근(1985:124)参照。

51) 남기심・고영근(1985:127)参照。

52) 이관규(1999/2002:161)参照。

[表 6] 日本の韓国語教材・辞書と韓国の学校文法で用いられる文法用語の対照

	가	도	-겠-	-면	-니다
①	格助詞	補助詞	補助語幹	接続語尾	終止語尾
②	格助詞	補助詞	補助語幹	接続語尾	終止語尾
③	名詞節形成助詞	強めの助詞	語幹形成接辞	接続形語尾	終止形語尾
④	格語尾	副語尾	接尾辞	接続形語尾	終止形語尾
⑤	格助詞	強めの助詞	語幹形成接辞	接続形語尾	終止形語尾
⑥	格助詞	助詞	補助語幹	接続語尾	終結語尾
⑦	格語尾	とりたて語尾	接尾辞	接続形語尾	終止形語尾
⑧	格助詞	助詞	補助語幹	接続語尾	終結語尾
⑨	格助詞	副助詞	接尾辞	接続形語尾	終止形語尾
⑩	格助詞	補助詞	先語末語尾	連結語尾	終結語尾

- ①石原六三・青山秀夫(1963)『朝鮮語四週間』
- ②天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)『現代朝鮮語辞典』
- ③梅田博之(1976)『韓国語Ⅰ』
- ④菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』
- ⑤梅田博之(1985)『NHK ハングル入門』
- ⑥大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)『朝鮮語大辞典』
- ⑦菅野裕臣他(共編)(1988/1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』
- ⑧油谷幸利他(共編)(1993)『朝鮮語辞典』
- ⑨菅野裕臣/浜之上幸・権容璟(改訂)(2007)『朝鮮語の入門 改訂版』
- ⑩남기심・고영근(1985)“표준 국어문법론”

おわりに

本稿では日本における1960年代以降の主要な韓国語教材と辞書を対象にし、その品詞と活用の記述内容について述べた。入手し得る同一著者の教材を複数あげて文法記述の変遷を追ったり、語幹あるいは語基による活用の特徴を示したりしたのは、韓国語教育のための諸文法体系が並存し得、しかも年代と共に変化していく様相を示したかったからである。その変化を動機付けているものの一つが韓国語学の研究成果であることは間違いない。

学校文法はその性格上、文法家の個人的な見解を排除し、全的に統一・単一化する必要がある。これは語学教育における文法と対照される点であることに注意しておきたい。本稿では韓国の学校文法が19世紀末から現在までどのような変遷を経て来たのかを述べた。その中で現在でもしばしば議論される「있다・없다」及び「이다・아니다」の品詞の処理に触れた。

日本の韓国語教育における文法と韓国の学校文法はそれぞれが目指す文法体系の構築に向けて変化し続けていくものと思われる。その変化の根源となる韓国語学の研究の動向に今後も注目することが必要であろう。

今回扱った韓国語教材と辞書における品詞と活用の記述には相違点がいくつか見られた。まとめると次の通りである。

[表 7] 日本の韓国語教材・辞書における品詞と活用の相違点

① 「이다」

独立した品詞（指定詞）	語尾
『朝鮮語四週間』(1963) 『韓国語 I』(1976) 『朝鮮語の入門』(1981) 『NHK ハングル入門』(1985) 『コスモス朝和辞典(第2版)』(1988/1991) 『朝鮮語辞典』(1993)	『現代朝鮮語辞典』(1967) 『朝鮮語大辞典』(1986)

② 語幹末に「ㄷ」を持つ用言

ㄷ変則	ㄷ語幹
『朝鮮語四週間』(1963) 『現代朝鮮語辞典』(1967) 『朝鮮語大辞典』(1986)	『韓国語 I』(1976) 『朝鮮語の入門』(1981) 『NHK ハングル入門』(1985) 『コスモス朝和辞典(第2版)』(1988/1991) 『朝鮮語辞典』(1993)

③ 「있다, 없다」

独立した品詞（存在詞）	形容詞
『朝鮮語四週間』(1963) 『現代朝鮮語辞典』(1967) 『韓国語 I』(1976) 『朝鮮語の入門』(1981) 『NHK ハングル入門』(1985) 『コスモス朝和辞典(第2版)』(1988/1991) 『朝鮮語辞典』(1993)	『朝鮮語大辞典』(1986)

④ 「는, 가…」

助詞	語尾
『朝鮮語四週間』(1963) 『現代朝鮮語辞典』(1967) 『韓国語 I』(1976) 『NHK ハングル入門』(1985) 『朝鮮語大辞典』(1986) 『朝鮮語辞典』(1993)	『朝鮮語の入門』(1981) ⁵³⁾ 『コスモス朝和辞典(第2版)』(1988/1991)

53) 改訂版(2007)では助詞を認めている。本稿の脚注19)参照。

⑤ 用言

語幹に語尾を付けて活用する	語基に語尾を付けて活用する
『朝鮮語四週間』(1963) 『現代朝鮮語辞典』(1967) 『朝鮮語辞典』(1993) 『朝鮮語大辞典』(1986)	『朝鮮語の入門』(1981) 『コスモス朝和辞典(第2版)』(1988/1991)

動詞節の構造は語幹に語幹形成接辞が付き, これに語尾が付いて構成される	述語の構造は語幹に語幹形成接辞が付き, これに語尾が付いて構成される
『韓国語 I』(1976)	『NHK ハングル入門』(1985)

参考文献

- 高永根(1993) “우리말의 총체서술과 문법체계”, 서울, 一志社.
- 고영근·남기심(1999) “최신판 고교문법자습서”, 서울, 塔出版社.
- 고창식·이명권·이병호(1965) “학교 문법 해설서”, 普文社, 金敏洙·河東鎬·高永根(共編)(1983) “歷代韓國文法大系” 第1部 第38冊 1104, 서울, 塔出版社 収録.
- 교육인적자원부(2002) “고등 학교 문법”, 서울.
- 權五聖他(編)(1994) “自山安廓國語學論著集 5”, 驪江出版社, 서울.
- 남기심·고영근(1985) “표준 국어문법론”, 서울, 塔出版社.
- 남기심·고영근(1993) “표준 국어문법론(개정판)”, 서울, 塔出版社.
- 남기심·고영근(2011) “표준 국어문법론(제3판)”, 서울, 塔出版社.
- 남기심·고영근(2014) “표준 국어문법론(제4판)”, 서울, 박이정.
- 남기심·고영근·유현경·최형용(2019) “표준 국어문법론(전면개정판)”, 서울, 한국문화사.
- 문교부(1964) ‘학교 문법의 통일에 대하여’, “편수 자료” 제 5 집, 金敏洙·河東鎬·高永根(共編)(1983) “歷代韓國文法大系” 第1部 第37冊 1100, 서울, 塔出版社 収録.
- 安廓(1917/1923) “修正 朝鮮文法”, 匯東書館, 權五聖·李泰鎭·崔元植(編)(1994) “自山安廓國語學論著集 一 第一部 著書類”, 서울, 驪江出版社 収録.
- 安田(야스다) 吉実·孫洛範(共編)(1983) “民衆엠텐스韓日辞典”, 서울, 한국문화사.
- 이관규(1999) “학교 문법론”, 서울, 월인.
- 이관규(1999/2002) “개정판 학교 문법론”, 서울, 월인.
- 이카라시 고이치(2002) “한국어 연구와 한국어의 텍스트 해석”, 서울, 서울대학교 대학원 박사학위논문.
- 鄭烈模(1946) “시편고등국어문법”, 한글문화사, 金敏洙·河東鎬·高永根(共編)(1985) “歷代韓國文法大系” 第1部 第25冊 161, 서울, 塔出版社 収録.
- 정승철·최형용(2015) ‘초판 조선문법’, 安廓, 1917, 唯一書館, “안학의 국어연구”:10-106, 서울, 박이정.
- 河東鎬(編)(1986) “한글論爭論說集 下”, 金敏洙·河東鎬·高永根(共編)(1986) “歷代韓國文法大系” 第3部 第11冊 323, 서울, 塔出版社 収録.

- 學校文法細部體系統一協議會(1967)‘學校文法統一案에 따른 細部體系에 對하여’, 金敏洙・河東鎬・高永根(共編)(1983)“歷代韓國文法大系”第1部第37冊1101, 서울, 塔出版社収録.
- 한국 국어교육 연구회(1964)“고등 국문법”, 向文社, 金敏洙・河東鎬・高永根(共編)(1983)“歷代韓國文法大系”第1部第38冊1103, 서울, 塔出版社収録.
- 石原六三・青山秀夫/河野六郎(監修)(1963)『朝鮮語四週間』, 東京, 大学書林.
- 菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』, 東京, 白水社.
- 菅野裕臣(1995)「朝鮮語語彙のクラスをめぐる」『朝鮮文化研究』第2号:1-20, 東京, 東京大学朝鮮文化研究施設.
- 菅野裕臣/浜之上幸・権容璟(改訂)(2007)『朝鮮語の入門 改訂版』, 東京, 白水社.
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人(共編)/金周源・徐尚揆・浜之上幸(協力)(1988/1991)『コスモス朝和辞典(第2版)』, 東京, 白水社.
- 桂正淑(2005)「日本における韓国語学習・教育の問題点—韓国語テキストの比較—」『文化情報学』第12巻第2号:33-45, 埼玉, 駿河台大学.
- 金賢信(2002)「日本の韓国・朝鮮語教育における異文化理解教育へ向けて(序説)」『一橋研究』第27巻3号:83-102, 東京, 一橋大学大学院学生会.
- 金蘭美(2013)「韓国語教材における文法記述の問題点—日本人学習者のための文法記述の提案—」『横浜国大 国語研究』第31号:51-38, 神奈川, 横浜国立大学国語国文学会.
- 国際文化フォーラム(2005)『日本の学校における韓国朝鮮語教育—大学等と高等学校の現状と課題—』, 東京, 財団法人国際文化フォーラム.
- 前間恭作(1909)『韓語通』, 東京, 丸善, 京都大学文学部国語学国文学研究室(編)(1974)『前間恭作著作集』上巻, 京都, 京都大学国文学会に収録.
- 前間恭作(1924)『龍歌故語箋』, 東洋文庫論叢第二, 京都大学文学部国語学国文学研究室(編)(1974)『前間恭作著作集』下巻, 京都, 京都大学国文学会に収録.
- 永原歩・尹亨仁(2012)「日本における韓国語テキストについて—大学での教材を中心に—」『神奈川大学言語研究』第34号:95-133, 神奈川, 神奈川大学外国語研究センター.
- 中島仁(2021)「大学における韓国語教育の現況と問題点」『外国語教育研究ジャーナル』第2巻:230-235, 東京, 立教大学外国語教育研究センター.
- 南基心(ナム・ギシム)・高永根(コ・ヨンゴン)・劉賢敬(ユ・ヒョンギョン)・崔炯龍(チェ・ヒョンヨン)/五十嵐孔一(監訳)(2021)『標準韓国語文法論』, 東京, ひつじ書房.
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)『朝鮮語大辞典』, 東京, 角川書店.
- 朴勇俊(1994)「日本の大学における朝鮮語教育に関する一考察—「導入初期」の指導指標を中心に—」『学校経営研究』第19巻:87-100, 茨城, 大塚学校経営研究会.
- 天理大学朝鮮学科研究室(編)(1967)『現代朝鮮語辞典』, 天理, 養徳社.
- 塚本勲(1983)『朝鮮語入門』, 東京, 岩波書店.
- 月脚達彦・伊藤英人(1999)「朝鮮語」『東京外国語大学史—独立百周年(建学百二十六年)記念—』953-1001, 東京, 東京外国語大学.
- 梅田博之(1976)『韓国語Ⅰ・Ⅱ』, 東京, 東京三中堂.
- 梅田博之(1985)『NHK ハングル入門』, 東京, 日本放送出版協会.
- 油谷幸利(1988)『ハングルの基礎』, 東京, 大修館書店.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎(共編)(1993)『朝鮮語辞典』, 東京, 小学館.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎(共編)(2018)『小学館 韓日辞典』, 東京, 小学館.